緑のまきば

2006 No.39

日本基督教団　小金井緑町教会
〒184-0003 東京都小金井市緑町四丁目一六―三三
電話・FAX　〇四二―三八一―七九六一
牧師　山畑　謙

説教

『明日に架ける橋』

山畑　謙

キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。

（ガラテヤ一・四）

一九七〇年二月二八日から六週間、全米ヒットチャート一位となり、アルバムも一〇週に渡って一位となった曲が、「明日に架ける橋」（邦題）でした。英語の題名はBridge Over Troubled Waterと言い、サイモンとガーファンクルという二人のフォークソングの歌手によって歌われたものです。その歌の中で、こう歌われています。「疲れ果て自信を失い、君の瞳から涙があふれる時、そのすべてを私が乾かしてあげよう。困った時や友だちもいないときには、私が君のそばにいる。荒れた川に架かる橋のように、この身を横たえよう。Like a bridge over troubled water, I will lay me down.」

この曲を書いたポール・サイモンは、彼の尊敬するジター牧師が歌っていた曲、「I'll be a bridge over deep water if you trust my name」（君が私の名により頼むなら、私は大水の上に架かる橋となろう）という曲からヒントを得て作っています。もともとの題名は「ヒム（賛歌）Hymn」だったそうです。この曲の"I"（私）をJesus（イエス）と理解して、ゴスペルソングとして歌うこともできるでしょう。実際に、アパルトヘイトという人種差別政策で苦しんだ南アフリカの黒人教会では、この曲が今でも讃美歌として歌われています。

この曲は一般的に熱烈なラブソングと言われたりしますが、私にはラブソングとして聞くには無理があるように思えてなりません。愛する者が病や事故などで打ちひしがれている時に、自分がその荒れる苦悩の激流に身を横たえて、その苦しみを乗り越える架け橋のようになれるなどとはとても思えないからです。横にいることはできても、結局何もできなくて、己の無力を嘆くしかないような者です。そんな者にとって、キリストとの出会いが、まさに明日に架ける橋を見出すこととなります。

「明日に架ける橋」という邦題は、名訳と言えるでしょう。七〇年代はじめは「明日」というフレーズが人気で、よく出てきていましたから、その時代を表しているとも言えます。しかし、このタイトルはその後時代が変わっても、多くの人の共感をよぶものとなっています。翻訳しにくいtroubled waterを、直接苦しみ悩みの川・海・水とせずに、希望のしるしとして「明日に」としたところが見事です。

旧約聖書の詩編詩人も言います。「神よ、わたしを救ってください。大水が喉元に達しました。わたしは深い沼にはまり込み、足がかりもありません。大水の深い底にまで沈み、奔流がわたしを押し流します。」（詩編六九・二～三）現代に生きる私たちも、大水に押し流され呑み込まれそうになります。しかし、イエス・キリストは、私たちのためにも十字架に身を横たえて橋となって、私たちを呑み込もうとする悪と混沌の大水から守り、明日への道を開いてくださっているのではないでしょうか。主イエスにあって、もう一つの詩編詩人の祈りが、私たちの祈りとなります。「主がわたしたちの味方でなかったなら、そのとき、大水がわたしたちを押し流し、激流がわたしたちを越えて行ったであろう。そのとき、わたしたちを越えて行ったであろう、驕り高ぶる大水が。」（詩編一二四・一～五）